

「ことばは五感で感じ、伝えるもの」

医療福祉ジャーナリズム分野 博士課程 西村多寿子

早瀬先生の講義の冒頭、奈良で生まれて、現在、横浜で生活されているとのお話がありました。私も同じです！ 私の場合、奈良で過ごしたのは3歳まで、その後、神戸⇒東京⇒大阪⇒東京⇒千葉⇒横浜、と関西と関東を行き来しました。結婚して、横浜に住んでから17年たちました。

奈良から横浜に引っ越したときに、手話が違ったというエピソードがありましたが、私の子どもの頃は、関西に行くとき「東京弁」といじめられ、関東に行くとき「大阪弁」とからかわれました。まあ、そのような言語体験が、言葉への興味につながり、工学系の音声言語研究に協力していた時期もありますし、現在も、医学英語を教えたり、医療関連記事を書いているので、そのような経験も貴重だったと思います。

お話を伺って、手話は自然言語だから、方言があるのも当然だな、と合点しましたが、今まで考えたことがなかったので新鮮でした。手話が母語で日本語が第二言語と分けて説明している文書を読んだことがあります。いずれにしても、山口先生が、理路整然、かつ、感情を声の抑揚の中にもうまく織り込んだ素晴らしい日本語で話されているのに感心しました。

講義をWEBで拝見しましたが、早瀬先生の手と体の動きを目で追い、山口先生の音声言語として超一流の表現を聞き、おふたりのあうんの呼吸のようなものが伝わってくる素晴らしいパフォーマンスだと思いました（聴者とのコミュニケーション時に必須である行為について、このような表現をすることが適切かどうかわかりませんが…）。

また、ことばは五感で感じ取るもの、伝えるものだということを、映画監督の仕事を通して、スタッフの方々に、まさにからだ全体で伝えたという話に感動しました。

私の日常は、人と対面で話すより、パソコンに向かって記事を書いている時間の方が長いこともあり、言語表現の身体性といえますか、顔の表情や、体全体で伝えるという側面を、最近やや軽視していたように感じ、反省しました。

心に響くお話をありがとうございました。